

## 診療放射線技師教育におけるOSCEの導入

### —実際の取り組みについて—

畠山 六郎 森 浩一 窪田 宜夫

茨城県立医療大学保健医療学部 放射線技術科学科

#### はじめに

茨城県立医療大学は、2000年度からは学部の教育システムを刷新し、急速に変化する高等教育にも対応できる医療専門職業人の育成を目指した。この教育改革は、2004年度「特色ある大学教育支援プログラム」として採択された。放射線技術科学科の主な取り組みは、講義項目の精選、臨床実習・チーム医療実習教材などの整備である。学内での実技指導は特に重要な科目と位置付け、大学として臨床実習に臨む学生の質的評価を十分に行った後に、実習病院に派遣するシステムを採用した。原則、この試験に合格しなければ臨床実習に参加できない。また、臨床実習を行う各施設の診療放射線技師に対しては、臨床教育講師や実習指導者の称号・授与規定を定め、臨床教育への関わりを明確にした。

ところで、オスキー（OSCE:客観的臨床能力試験）は、本邦では1993年に川崎医科大学ではじめて、オスキーと称される模擬患者等を導入した診療技能教育が行なわれ、2003年には全国の医学部で「OSCE・CBT」の実施されるに至った。本学では2003年度からオスキー導入に向けた検討が開始された。翌年には放射線技術科学科を除く3学科においてオスキーが開始され、前期と後期の2回施行されるに至った。放射線技術科学科では2005年度に臨床実習前の技能習得度評価、前述のオスキー相当の評価試験を導入した。さらに、2006年度には臨床実習開始の前と終了後の2回施行した。これまで、診療放射線技師教育におけるオスキーの技能評価内容や対象学生の感想について言及されたことはない。

そこで、本研究では、臨床実習開始前・後の基礎技能習得度の評価や対象学生の感想などについて検討した。さらに、その技能評価内容とその有用性について検討することを目的とした。

#### 方法

2005年度臨床実習前技能習得度の評価は、本学科3年生を対象とし、実習で特に必要とされる基礎技術と知識を選び、患者接遇法、X線撮影法や核医学検査手技、放射線治療部位の位置合せと線量計算などの10項目について評価した。評価においては、模擬患者（本学科4年生、教員）を導入した。模擬患者には、試技中に適当な質問を1回行うように指導した。技能評価は、学生40名を4グループに分け、評価項目毎に区分された評価室で行った。評価に要する時間は、1評価項目/6分とした。評価者（学科教員）が評価表に記入にした。この時、模擬患者からのコメントも採点の参考にした。また、外部評価者を導入し、プログラム全般の客観的評価も行った。さらに、2006年度から臨床実習開始前は前述と同様に行い、臨床実習終了後は主にX線、CT、MRI、SPECT画像について、口頭試問形式にて評価した。試技後には、学生へのアンケート調査を行い、この評価を受けての感想を求めた。

## 結果

X線、CT、MRI撮影法の場合、①患者の容態を観察、②指定された部位をどのように撮影するかの方針決定、③機材の選定（カセット、固定具、RLマークなど）④患者の撮影室への導入、⑤撮影患者に誤りがないうちの確認、⑥撮影部位の確認、⑦指定部位のポジショニング、また、⑧核医学では骨、ガリウムシンチグラフィの基本的な撮像条件やシンチグラムの口頭試問を行った。⑨放射線治療では対象部位の適正線量などの口頭試問とした。さらに、⑩患者からの質問への適切な回答とした。以上の項目において、指導を必要とする場合もあったが、学生の成績はおおむね良好であった。また、学生アンケート調査では、大半の学生は実際の実習に臨んで、どれもが重要であるとかよくわかった、と述べた。そして、患者様のポジショニングなど落ち着いて対応できたと振り返った。さらに、次のような感想が寄せられた。

### 1). 実習前技能評価の感想

実習前技能評価は、実習前に勉強するいい機会となった。実際の技能評価では先生方に足りない所を指摘して頂き、実習で何を学ぶべきか目標を持つことができ、とても良かったです。一般撮影のポジショニングや治療の線量計算などを臨床実習中にすることがありましたが、オスキーに出題しましたので取り組みやすかった。

### 2). 実習後技能評価の感想

実習後技能評価は、口頭試問に出題した画像は実習先の画像と表示やサイズなど、いたるところで異なっていた。質問の意図が分かり難いものもあり、もう少し限定された質問の方が答え易かった様に感じた。また、質問に対する答えが、模範解答と必ずしも一致しないこともあり、戸惑った。実習先によって多少の差異があるので、考慮して欲しいと思います。

教員および外部者の評価は、おおむね良好であったものの、実習後技能評価の感想でみるように、実習施設による画像表示の相違などの点で工夫を要することが分かった。

## 考察

オスキーを実施することで、学生は臨床実習で何を学ぶのか、どのようにして学ばよいか、臨床実習の目的をより明確にできたと考えられる。これは積極的な学習態度を引き起こすことに有用である。基礎技術の習得や臨床実習への心構ができれば、限られた時間の中で効率よく臨床実習を進めることができるであろう。また、実習後技能評価では大方の学生が「膨大な知識を整理する上で大変役立った」と述べている。このような点から大学3年次において授業内容をまとめることは学生の今後にとって有意義であると考えられた。

今後、各施設の臨床教育講師の意見を参考にし、評価基準や評価内容をさらに充実させることができるものとする。

## まとめ

診療放射線技師教育における臨床実習前・後のオスキー導入は、自己発展性を備える医療専門人の育成の観点から重要と考えられる。放射線技師養成大学でのオスキー導入は本学がはじめての試みであり、今後の専門的医療人育成の成果が期待される。